
世界で一番キミが嫌い

神崎ミキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番キミが嫌い

【Nコード】

N7061K

【作者名】

神崎ミキ

【あらすじ】

僕には好きな人がいた。

ひねくれもので、偶に嘘をつくような奴だけど、僕は彼女が好きだった。

夏の日差しを受けて汗をかきつつも、僕は足を一步一步進めていく。学校帰りに病院に向かう途中。右手には面倒くさいと言う理由で全ての教科書が詰め込まれた学校指定の鞆、左手にはのどが渴いたため途中で買ったスポーツドリンク。

鞆は重いし、ドリンクは既に温くなってて飲めたもんじゃない。もういっそ、両方共そこらに捨ててしまおうか……とかなんとかごちやごちや考えていると、病院が見えたので取り敢えず一息ついた。病院に近づくとドアが僕を歓迎するかのようになり、ひとりでに開く。幼少からの疑問だが自動ドアはどういう仕組みなんだろうか？

前に彩に聞いたなら『実は監視カメラが仕掛けられているんだよ、人が近づくと自動ドアセンターの人がボタンを押して開けてくれるんだ』と教えてくれて、なるほどと思ったのだが後に話した友人に『それはすでに自動ではなく、手動ドアでは？』と言われて初めて騙された事に気づいた。

彩はよく嘘を嘘だと感じさせずに話すことがある。ドラマとかに出てくる詐欺師より上手いかもしれない。

まあ、僕は騙されたからと言って怒ったりはしないけど。

これは彼女なりのコミュニケーションのとり方だと分かっているから。

それに騙されたからと言って、何か被害があった訳でもない。精々、僕が恥をかく程度だ。

病院に入ると外の暑さから解放され、かいた汗を拭う。

それからエレベーターに乗り、なんやかんやで目的地まで辿り着いた。

別に、四階で降りるはずがすっかり五階まで行っちゃい階段で下りてきた……なんてことはなかった。そう、なかった。

僕は、そうして何の問題も無く辿り着いた病室の扉を開き――

「どちらさまですか？」

そう部屋の主に出迎えられた。

僕は思わず無言で立ち尽くす。

決して間違えたわけではない。

そんな他人行儀な発言をしたのは、僕が見舞いに來たはずの彩だ。

「まあまあ落ち着いて、新しい友と書いて新友」

「出会ってもう三年目なんだけど」

「じゃあ、真の友と書いて真友」

「おお、それいいね」

「いや、ここは意表をついてしんにゆうとかどうだ」

「彩はいつたい何と戦ってるんだ？　そして、それは漢字の部首か？」

「まあ、冗談はここまでにしておいて……みかん食べる？」

彩は枕元に常備されているみかん袋から一つ取り出し、僕に差し出す。

もう片方の手にもすでにみかんがセットされている。

本人は否定してるが、彩はみかんが好物であり、僕が病室を訪れると常にみかんの皮が十個ほど並んでいる。

剥いた後の皮を丸めて、さも中身があるように見せてあるものが偶にあるのが謎だ。おかげで前に騙されて食べようと掴んでしまつてクスクスと笑われた。

「ところでいつぐらいに退院できるの？」

彩はかれこれ三ヶ月ほど入院している。

確か急性肝炎だと言っていたので、そろそろ退院出来るころだと思うのだが。

未だに彩はその事を教えてくれない。

「さうね、私重病人だからね」

聞いてもいつもこんな風にはぐらかされる。

「そついや、ここ一週間来るなつて言つてたけど」

基本僕は毎日ここに通っているが、偶に來てはいけない日がある。

最初は病気が悪化したんじゃないかと看護師さんに聞いたことがあるが大した事ないから気にしないでといわれた。

「……実は急性上気道炎にかかってしまっただけ、キミに感染するといけないと思って……」

悲しげに彩はうつむく。

「普通に風邪がうつらないようにって言ったら？」

「あら、よく知ってたね」

「そりゃ常識だからね」

つまらなそうにする彩に対して、普段言い負かされてる分、僕は得意げに応えた、のだが。

「昨日やってた医療番組で言ってたもんね」

「………みかんもう一個もらえる？」

図星を突かれた僕は、話をそらし、彩が投げたみかんを受け取り、無言で食べる。

「まあ、キミも見ていたならちょうど良い」

「………なに？」

「余命を宣告された人ってどんな気分なんだろう？」

「………さあ、実際にそんな立場に成らなきゃ分からないけど、思い残すことのないようにするんじゃないかな、家族や友達、恋人と過ごしたり」

昨日の特集で取り上げられていた人も、最後の瞬間まで家族と一緒に過ごしていた。

最後の一瞬まで笑っていたいと。

思い出を作りたいと。

「………どうせ死ぬのなら、むしろ誰の思いにも残らないようにすればいいのに」

だが、彩はそれを否定した。

その声は冷たく、感情が籠っていない様に感じた。

「おい、彩。ここは病院なんだから、そんな軽率なこと言わない方が——」

「そんなの私の自由じゃない、そもそも私は誰にどう思われようと気にしない、ましてや誰が死のうとどうでもいい」

「――彩っ！」

僕は気が付けば立ち上がっていた。

勢い良く、座っていた椅子が倒れたのも気にせず。

いつもの軽口なら気にはしない。

けれど今回は違った。

不謹慎だからだとか、人の命を軽く扱ったからだとか……理由を考えればいくつが出てくる。

それでも、僕にとっては思わずだった。

今の彩の言葉を流してはいけない、そう直感的に感じたからだろうか、僕は彩の言葉をかき消さんばかりに叫んだ。

……頭に血が上っているのが自分でもよく分かる。

「彩はいつもそうだ、ひねくれた事ばかり言ってる！」

彩は本音を明かさない。

他人と距離を取り、自分も他人を近寄らせない。

無理やり近くにいる事を選んだ僕でさえ、彼女が感情的になったところなんて見たことが無い。

「もう少し素直に……本音をぶついたりしないと、いつか後悔するぞ！」

それは僕の本音。

ずっと心の中思いつつも口にして来なかった言葉。

熱くなる僕に対して彩は冷静に、表情一つ変えない。

「静かにしたら？　ここは病院だよ。そもそもキミが言ってるのは単なるキミの私見でしかなく、全人類がキミと同じ考えたと思うのなら、キミはずいぶん傲慢だね」

「なっ！」

「いいだろう、じゃあ私はこれから一切本音を口にしない。そして一人で死ぬまで生きる」

「……そんなことできるわけないだろ」

「できるさ。分かったら、さっさと出てってくれるかい。キミの顔なんて二度と見たくない。……声すらもだ」

彩の拒絶。

無表情だった彩の顔が一瞬歪んだ……ように見えた。

が、おそらく錯覚だろう。

今見える彩の目は、背筋が凍りつきそうなくらいに感情が無く、冷たかった、

病室には音も無く、風も無い。

ここには、彩と僕がいるだけで何も無い。

他にあるとしたら僕の感情であり、彩のそれは無い。

もう一言言い返そうとしたが、この何も無い空間が僕の口から声が出る事許さず、結局開いた口は僅かに動いただけ。何も言えず僕は病室を出るしかなかった。

廊下に出ると看護師さんが心配そうな顔をしていたので、意味も分からず礼をしてその場を去った。

家に帰ると、母が夕飯の準備をしていた。

母が『おかえり』と声をかけてくれる。

僕は何も応えず自分の部屋に籠った。

今は何も喋りたくなかった。

何も聞きたくなかった。

何も感じたくなかった。

部屋で何をするでもなく、明かりもつけずベッドに横たわり、布団を被って光を完全に閉ざした。

「二度と顔を見せるな、か……」

病院で言った事、あれは僕の本心だった。

彩と初めて出会った時、彼女は心を閉ざしていた。

『私の人生に他人は要らない』

そう言った当時の彼女は一人で教室の隅で本を読み、誰とも喋らず、誰とも関わらず。

他を拒絶していた。

その当時の彩と今の彩を比べれば、彼女は明るくなった。クラスでも孤立していないし、僕とも話をしてくれる。

でも——違う。

彼女は、まだ心に壁を作っている。

作ったようなあの喋り方も、その証拠。

彼女は、本来の自分を隠す事で、明るく振る舞ってきた。誰にも心を許さず。

そう……僕は今まで思ってきた。

けれど、今僕の認識は揺れている。

僕は間違っていたんじゃないかと。

それは僕の勝手な思い込みだったんじゃないかと。

本音を一切隠して生きるなんて無理だとさっき自分でも言っていたではないか。

なのに——どうして彩が一度も本音を見せていないなんてずっと思っていたんだろう。

彩は『もう本音を』と言ったんだ。『もう』と。

馬鹿だったのは僕の方だ。

勝手に彼女を分かったつもりになって、自分勝手な意見押し付けて。彩の考えなんて理解出来ない諦めて。

彼女は今、何を思っているんだろう。

僕は彼女に本当に嫌われてしまったのだろうか。

彼女は、もう二度本音を見せてはくれないのだろうか。

……あれ？

何かおかしい。

僕は病室での彩とのやりとりを正確に思い出し、考える。

そして——気づいた。

「はは……ほんと素直じゃない」

僕は携帯を手にとり、短縮から彩に電話をかける。

コール音が何度も鳴った後、留守番センターに繋がる。

それを三度ほど繰り返したところでは、逆に今度は一瞬でコール音がやんだ。ワン切りもびっくりの早さである。

「……さっきから何なんだ鬱陶しい。声も聞きたくないと言ったはずだろうが」

「だったら携帯の電源を切れればいい」

実際、携帯の使用を禁止されてる病院で電源を入れているのはおかしい。それはもう、電話してくれと言ってるようなものだ。

「本音は一切口にしないんだろ？」

電話の向こうで黙っている彩に、答えを確認するかのように僕は言う。

本音を言わない、それはつまり、それ以降の言葉は全て本音ではないという事。

全て嘘ってことだ。

声を聞きたくないってのも、会いたくないってのも——嫌いだったのも。

「……それじゃあ、まるで私がキミが好きみたいじゃないか」

「僕は彩が好きだけど」

「……なっ！ 何言ってるんだキミは！」

「告白？」

「……疑問文で返されても困るんだが」

「じゃあ、告白で」

「はあ……全くキミという奴は……」

溜息。

電話越しでもよく分かる。

彩も感情を持った一人の人間であり、本音を一切隠すなど無理だったのだと。

そして一息ついた後、

「では、私からも一言」

そう言って、言葉を綴っていく。

「私は、鷺津彩は、世界中の誰よりもキミが……祐一が嫌いだ」
それは、とてもとても穏やかな声だった。

「そっか……はは」

思わず顔がにやける。

嫌いと言われて、嬉しいと思うなんて珍しい体験だと思う。

そこだけ聞くと、僕が変な奴に思われそうだ。

だが言葉の表面上だけでなく、言葉に籠った想いを感じていれば、不思議なところなんて無い。

「では祐一、あまり長話すると医者がつるさいので、そろそろ切るぞ」

「そっか……じゃあしょうがない、続きは明日だ」

本当はもう少し話をしていたかった。

だが、向こうが病院であるという事を考えて渋々諦めることにした。

「……そうだな、また明日」

彩はそう言つと、数秒程間を置いて電話を切った。

今の間は、なんだったんだろうか？

頭を少し傾げるが、すぐに『ま、いつか』とベッドに横たわる。

そんな事が、どうでもよく思えるくらい僕は幸せでいっぱいだった。

明日、どんな風に病室に入ろうか

何を話そうか

彩が退院したらどこに行こうか

色々な思考が頭を巡る。

早く明日にならないかと期待に胸を躍らせながら僕は目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7061k/>

世界で一番キミが嫌い

2011年10月6日10時45分発行